提　言

檻の中の猿

森内　浩幸
（長崎大学大学病院小児科 / 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻展開医療科学講座小児科学分野）

サル年を迎え，この賢くもあり愛嬌のある動物のことを考えていました。同じ九州に居て，高崎山のサルの政争（ボスの座を巡る争いや群れ同士の抗争）やゴシップ（男女関係のトラブル）を報じる人間（？）臭い記事に微笑んだり苦笑いしたりしながら，生物学的に当然のこととはいえヒトとサルの関係は他のどの動物よりも近いことを実感します。長崎の町中でもたまに野生のサルが出没して一騒動起こすことがありますが，その頭の良さと運動能力の高さのため，なかなか捕まえることができません。「敵も然る者（侮れない者）」という言葉がいつの間にか「敵もサル者引っ掻く者」と転じてしまった経緯も，何となくわかる気がします。

改めて「サル」に因んだ言葉を見返すと，「猿知恵」，「猿に烏帽子」，「猿の尻笑い」，「意馬心猿」等々，なまじ近い間柄で比較しやすいためか，案外私たちは自分によく似たこの動物に対し軽蔑した言い回しをしていることがわかります。そんな熟語や諺を読み返すうちに，私には馴染みがないものが二三目に飛び込んで来ました。「籠鳥檻猿（ろうちょうかんえん）」と「猿を檻中に置けば豚と同じ」です。前者は文字通り「籠の中の鳥や檻の中の猿と同じように，自由が束縛された状態」を示すもので，やはり自由自在にあちこち動き回る存在として，猿はすぐに思い浮かぶのでしょう。後者は紀元前4世紀宋の時代の思想家・政治家であった恵子（恵施）の言葉として「韓非子」に紹介されています。「猿も狭い檻に閉じ込めてしまえば敏捷さがなくなり，鈍重な豚と同じ」，転じて「有能な人であっても，十分な条件や情報が与えられなければ能力を発揮できず，無能な者に等しい」という意味のようです。ちょっと豚には失礼ですが，やはり私たちは猿がそれだけ有能だと評価している現れなのでしょう。

私たち大人の目から見た子どもって，どんなものでしょう。「悪知恵が働くけれど，常識や思慮深さに欠けている」とか「放っておくとあちこち飛び回って何をしでかすかわからない」とか，何だか子どもをどこか猿扱いしているような言葉を耳にすることがあります。実際のところ，Scammonの有名な発育型図を引っ張るまでもなく5～6歳までに脳の発達はほぼ完成し，中高年になってジリジリと脳が劣化している私などと比べると子どもの頭の回転は圧倒的に速いものです。それなのに，経験のなさとフットワークの良すぎることから来る失敗を周囲の大人たちが恐れ，子どもたちを檻の中に閉じ込めてしまってはいないでしょうか？そしてその結果，子どもたちが本来持っている良さを潰してしまってはいないでしょうか？

三猿の教え「見ざる言わざる聞かざる」は本来「とかく人は自分にとって都合の悪いことや相手の欠点を，見たり聞いたり言ったりしがちだが，そんなことはしない方がいい」という叡智の戒めで，「特に子どもの時は，世の中の悪いことを見聞きしたり言ったりしないで，素直に育ちなさい」という教育論的な意味合いがあるそうです。確かに悪への誘惑に耳を貸し目を奪われてはいけませんが，子どもから何でもかんでも取り上げ，事勿れ主義に陥ってはいないでしょうか？少なくとも私たち大人は，子どもの心の状態や動きをしっかりと観，子どもの声なき声を聴き，そして子どもに言葉と行動で働き掛ける存在であるべきです。子どもを檻の中に閉じ込めるのではなく，やんちゃさに困ることがあっても，子どもが子どもらしくその天性を発揮できる世の中にしていきたいものです。

Presented by Medical*Online